1976

社説

がんの予防対策を多角的に

十七回目のがん征圧月間がはじまっている。各地で講演会や展示会などが催され、二十八、二十九日には、仙台でがん対策推進合同研究会とがん征圧全国大会が開かれる。開催地の宮城県は昭和三十五年と昭和三十七年にそれぞれ胃がん、子宮がんの集団検診を全国にさきがけて始めた県である。いまでは集団検診が全国に定着した。その結果、胃がん、子宮がんの死者は着実に減る方向にある。

しかし、がんによる死者の数は依然として増えつづけている。死因の順位が脳卒中について二位であることは変わらないが、脳卒中と三位の心臓病の死亡率は下がっているにもかかわらず、がんの死亡率はいまも増加傾向にある。急速に増加しているのが肺がんであり、乳がん、すい臓がん、白血病も増えている。

ただ、胃がん、子宮がんのように死亡率の減るがんがあることは、適切な対策がとられるなら、がんは十分に減らせるものであることを示している。その一つは早期発見、早期治療である。胃がんや子宮がんと同じように、肺がん、乳がんについては、その効果を期待することができそうである。乳がんの集団検診はすでに十三の都道府県が始めた。肺がんの集団検診も、企業主体、会員向けなど形はさまざまだが、七つの都道府県でとりあげている。

胃がんの減少の理由には、食生活の変化もある。「電気冷蔵庫が普及すると胃がんが減る」。つまり、食品の貯蔵に関連する添加物などがん原性のある物質を減らせることも胃がんを少なくするのに役立っているといわれる。逆に乳がん、大腸がんなどの増加は脂肪食の普及に関係があるとされている。

これらは、食物とがんとの関係についての綿密な研究、とくに食品添加物の影響についての総点検が不可欠であることを示している。一昨年、肝臓がんの原因になるとして禁止された防腐剤AF2は最近の目だつ例だが、食物が原因になるいわゆる食物がんを減らすため、不断の見直しを怠ってはなるまい。

食物だけでなく、人間の環境からもがんの原因を減らさなければならない。技術、工業の発展で身のまわりにがんの原因になるものが増えている。六価クロム、塩化ビニール・モノマーなどの例がいわゆる環境がんの中で記憶に新しい。この領域でも総点検の必要が明らかである。

喫煙が肺がんだけでなく、もろもろのがんの原因になることも、ますますはっきりした。とくに喫煙と他のがん原因たとえばアスベスト(石綿)にさらされるといったことが重なると、肺がんにかかりやすくなることもわかった。判明したがんの原因はできるだけ取り除くことに努めるべきであろう。

がん研究でハイ・リスク・グループ(高危険度人間)という言葉がでてきたのにも注目したい。これは普通の人に比べてがんになりやすい人たちという意味である。遺伝、免疫など身体的な条件によって、同じようにたばこをのんでも肺がんになりやすさで大きな違いができることがわかったのである。こうした高危険度人間に対しては重点的に健康管理を行うとか、がんの危険につながるような環境からできるだけ避けるといった対策が必要になる。その前に、高危険度の生物学的説明をつけるための基礎研究を深めなければならない。

しかし、こうしたとらえ方がでてきたことは、がん攻略が次第に進んでいることを示すものだ。世界保健機関が昨年末の報告でも述べている通り、「今後二、三十年の間にがんの治療法が発見されると信ずるのは途方もないことではない」であろう。がん対策の着実な前進を期待したい。